

どんなに科学が発達しても、人類は我々の宇宙を「宇宙の外」から見ることはできません。かつての人類が、地球の真の姿を見られなかったのと同じです。宇宙どころか、我々の住む銀河系ですら「銀河系の外」から見たものはないのです。1977年に打ち上げられた惑星探査機「ボイジャー1号」は、打ち上げから46年以上経ってもなお地球との通信が保持されていて、驚くべきことに現在でもNASAが「運用中」の現役の惑星探査機です。太陽から220億km以上離れた宇宙空間を秒速約17kmで飛行中で、「地球から最も遠くにある人工物体」とされています。ボイジャー1号は10年以上前にすでに太陽系（正確には太陽圏）を離脱していますが、太陽系の全体像を「1枚の写真」に収めることはできませんでした。我々は太陽系の真の姿すら、まだ目撃していないのです。

しかし現在の人類は、地球の姿をリアルタイムで見ることができます。赤道上の静止衛星のおかげです。特に日本の「ひまわり8号」の画像はすばらしく、雲の発生や消滅の様子、黄砂や火山の噴煙まで、リアルタイムで観察できます。ひまわりの衛星画像はさまざまなバンド（光の波長）で見ることができ、赤外観測では夜間の雲の動きも鮮明にわかります。しかし私は「全球可視画像」が一番好きです。宇宙から見える最もリアルな地球の姿だからです。

映像は4月18日の「地球の一日」です。地球は西から東に向かって自転していますが、静止衛星も地球の自転と同じ角速度で公転しているので、実質的に地球と一緒に自転しているのと同じです。従って、同じ場所（太平洋上の赤道上空）から常に地球を眺めていることになります。春分を過ぎているので、太陽の反射がわずかに赤道よりも北に寄っているのも面白いと思いました。

(2024年4月中旬／衛星動画)

